

## 博士論文要旨

### 論文題目：近世近代初期日朝関係における朝鮮語通訳官「通詞」

KIM Woobinn

(The University of British Columbia 非常勤講師)

幕藩体制下、日朝関係を担当していたのは対馬藩である。対馬藩は釜山草梁倭館における貿易や、朝鮮漂流民送還を通じて日朝関係を維持してきた。対馬藩にとって、貿易は藩財政の重要な要素であるため、日朝間の良好な外交関係の維持は不可欠であった。日朝両国間で意思疎通の実務を担当していたのが、通詞（朝鮮側の通訳官は「訳官」である）であった。彼らは、朝鮮通信使が来日する際や、草梁倭館において貿易と交渉が行われる際、また朝鮮漂流民を送還する際に通訳官として活躍した。しかし、明治期になると廃藩置県（1871）により、日朝間の仲介という役割は対馬藩から外務省へと移った。当時、維新政府は欧米からの圧力により、朝鮮に対して新たな日朝関係を求めている。本研究では近世から近代における朝鮮語教育や、朝鮮語通詞の役割について着目し、日朝関係の変化とともにどのように変遷していったのかについて考察した。また、幕末・維新时期にわたって活躍していた旧対馬藩の通詞浦瀬裕を通して、通詞の役割やその活動範囲の変遷を研究した。

本論文は第6章に分かれている。第1章では、近世日本における朝鮮語教育を紹介し、先行研究を行った。近世日本における朝鮮語教育は主に薩摩藩、長崎、そして対馬藩で行われていた。薩摩藩では、壬辰倭乱（文禄の役）の際、島津軍から連行された朝鮮人陶工たちが住んでいた苗代川という村落で朝鮮語を伝えていた。一方、長崎では長崎に滞在していた対馬藩の朝鮮語通詞が長州藩の朝鮮語通詞に朝鮮語を教えていた。長州藩は朝鮮と直接かかわってはいなかったが、頻繁に朝鮮人が漂着し、漂流民を送還するために朝鮮語で疎通できる人材が必要であった。このうち、近世日本において朝鮮語教育が最も体系的に行われていたのは対馬藩である。

この章では本論文の各章と内容を紹介する。本論文では近世日本における朝鮮語教育及び朝鮮と日本の間で通訳を担当していた対馬出身の「通詞」について触れ、また、近代に

なってから朝鮮語教育及び通訳がどのように変遷していたのかについて取り上げた。続いて先行研究及び本論文の構成について紹介する。

第2章では、近世日本における朝鮮語教育機関について取り上げた。近世日本とは異なり、近世朝鮮では中央政府が日朝関係を担当していたため、通訳官を養成することにも政府が携わっていた。朝鮮では太祖2年（1393）より言語教育機関「司譯院」が建てられた。そこで漢学、蒙学、女眞学、倭学が教えられ、中央政府の通訳官が育成された。朝鮮王朝では朝鮮政府が運営していた倭語教育機関があったのに対し、日本側は日朝関係を対馬藩が担当していたため、対馬藩では公的な教育機関なしで朝鮮語を習得させていた。そこで、儒学者の雨森芳洲によって体系的な朝鮮語教育を行う機関である、朝鮮語「稽古所」が創立された。これは当時、対馬藩と朝鮮政府の間で通訳員として活躍していた「通詞」の確保が急務となったからである。

この章では、泉澄一が編集した『芳洲外交関係資料集 雨森芳洲全書三 書翰』（1982）及び、現在韓国国史編纂委員会に所蔵されている宗家文書「詞稽古之者仕立記録」を通じて、雨森芳洲が朝鮮語「稽古所」を創立する以前にどのように朝鮮語教育が行われていたのか、また「稽古所」創立以降に新しくできた教育のカリキュラムに関して考察した。

一方、当時釜山草梁倭館に留学した学習生は、朝鮮語だけではなく医学を勉強するためという者もいた。彼らについても宗家文書「御稽古ニ御師匠被仰付候名前并御家中諸稽古方ニ付御宛行其外被成下他所へ稽古被罷出候儀ホを記ス」（寛永13年～寛延3年）（長崎県立対馬歴史民俗資料館所蔵）を通じて追究した。

第3章では、対馬藩の朝鮮語通訳者「通詞」の任務について取り上げた。当時通詞は主に三つの仕事に携わっていた。朝鮮通信使の通訳、朝鮮人漂流民の送還、そして草梁倭館における事務及び通訳である。朝鮮との交易に依存していた対馬藩にとって友好的な交隣関係を保つのが任務の重要な要素であった。

またこの章では、資源が限られていた対馬でどのように通詞の人材を維持していたのかについて考察した。韓国国史編纂委員会に所蔵されている宗家文書「明和四丁亥年ヨリ寛政十庚申ニ至 通詞 被召仕方 漂流民迎送 町代官 御免札 朝鮮方」を通じて対馬藩の朝鮮語通詞の職階や、任務、昇進、及び褒賞について検討した。従来の研究によると、朝鮮語通詞は朝鮮との貿易特権が許されていた商人のグループ「六十人」が勤めていたとさ

れていたが、対馬藩の大通詞であった小田常五郎の事例を追及することによって、「六十人」の格は褒美として藩から与えられるものであったことを明らかにした。このように資源に乏しい対馬藩は、「六十人」のような対馬藩独特の貿易特権を与えることによって、優秀な人材を維持したのである。

第4章では、明治期の維新政府の成立が日本における朝鮮語教育にどのような影響を与えたのか、維新政府の成立以降における朝鮮語教育機関の変遷を考察した。

19世紀に、対朝鮮関係を担当する機関は対馬藩から維新政府へと移った。まもなく、厳原に朝鮮語教育所「韓語学所」が開校されるが、その意図は近世雨森芳洲により開校された朝鮮語教育機関とは異なる。この章では、現在釜山広域市民図書館に所蔵されている朝鮮総督府編の「朝鮮事務書」（1巻～29巻）を通じて朝鮮語教育機関の変遷及び、教育の目的について取り上げた。

さらに外務省が設立した「韓語学所」開校の過程を検証することによって、カリキュラムや、またそこで朝鮮語を学んだ人々が修了後どのような活躍をしたのかを追究した。後にこの学校は釜山へ移転され、さらにその後東京外国語学校の朝鮮語課となった。当初、言語中心的教育を行っていたが東京へ移転してからは、歴史、地理、代数、幾何、漢書、体操などの科目も加わり、高等教育を受けたエリートの育成へと性質を変えていった。

朝鮮語教育は明治9年（1876）日朝修好条規が結ばれてから日本全国的に広がり、様々な教育機関で第二言語として開設された。植田晃次の研究『研究成果報告書 日本近現代朝鮮語教育史<sup>1</sup>』（2007）では、特に日清戦争及び日露戦争後、朝鮮語を第二言語として開設した学校の数が増えてきたのがわかる。このようにこの章では時代背景及び対外関係が朝鮮語教育の普及に与えた影響を考察する。

第5章では、維新时期に入ってから朝鮮語を学ぶ人々の目的について具体的に取り上げた。明治期朝鮮における日本人の朝鮮語学習者は近世と違い、対馬出身の通訳員だけではなく様々な地域から様々な目的のため朝鮮語を学習しにきた。近世日本の場合、朝鮮語を学ぶ目的は主に貿易と外交交流のためであった。だが、近代に入ると明治9年（1876）日本と

---

<sup>1</sup> 植田晃次編『研究成果報告書 日本近現代朝鮮語教育史』大阪：大阪大学大学院言語文化研究科言語コミュニケーション論講座・朝鮮語部会（2007）23

朝鮮は日朝修好条規（江華島条約）を結び、朝鮮は釜山・元山（1880）・仁川（1883）を開港した。日朝修好条規締結の直後において朝鮮語を学ぶ人々の目的は、外務省に勤務するため、商売のため、布教のための三つに分けられる。それぞれの目的によって、学ぶ場所や内容も異なっていた。この章では、時代背景も考察し、朝鮮語を学んだ人々の目的について検討した。

外務省や、陸軍省など政府に所属している者に朝鮮語を学ばせていた以前とは異なり、公開的な募集により、朝鮮の言葉や文化に興味を持つ人を選抜し、彼らを朝鮮に派遣し外務省の官費留学生として研修させた。留学先は京城であったが、その理由は公務に務める彼らにとって、訛りのない標準語を使うのが重要な要素であったからである。第1期生は3人おり、朝鮮語レベルも人によって様々であった。そこでは、個人に合わせた個別的教育が行われた。学生は教師を自由に雇うことができ、また教材も自分で選んで勉強することができた。彼らの言語力は数ヶ月に一度行われる試験により調査された。

前間恭作は第1期生の3人のうちの一人だった。前間は対馬出身で、対馬の中学で朝鮮語を学んだことがきっかけとなり朝鮮語に興味を持ち、明治24年（1891）7月外務省による朝鮮留学生の募集に応募し、官費留学生として朝鮮へ派遣された。彼は後、数冊の朝鮮の古書を収集し、解題した。彼の著書は『韓語通』（丸善株式会社、1909）や、『竜歌故語箋』（東洋文庫、1926）などがある。

明治9年（1876）日本と朝鮮の間で日朝修好条規（1876）が結ばれた。この条約により、日本人は朝鮮で自由に借地・建築及び居住することが認められ、朝鮮で自由に貿易活動ができるようになった。釜山（1876）・元山（1880）・仁川（1883）が開港され、移動範囲は各港より4方100里（1里＝0.393km）に決められた<sup>2</sup>。そして、釜山が開港した明治9年（1876）から日本人の朝鮮への渡航が始まった。渡航する背景としては、廃藩置県や西南戦争によるインフレ及び経済変動、また維新政府の保護・特権を享受した巨大業者が地方経済を圧迫したことなどが挙げられる<sup>3</sup>。

---

<sup>2</sup> ハン・ウクン著『한국개항기의 상업연구』（韓国開港期の商業研究）ソウル：一潮閣（1970）45-6。

<sup>3</sup> 木村健二著『在朝日本人の社会史』東京：未来社（1989）40-1。

当時どのくらい日本人が朝鮮へ移住したのかを把握するため、外務省が発行した旅券「明治 13 年 海外旅券下付返納表進達一件 朝鮮<sup>4</sup>」と「明治 14 年 海外旅券下付返納表進達一件 府県渡 朝鮮」を比較し、朝鮮へ渡航した人がどのくらい増加したのかを調査した。また、植田晃次の『研究成果報告書 日本近現代朝鮮語教育史』（2007）を取り上げ、日本と朝鮮における教育機関のうち、商業学校ではどのくらい朝鮮語授業が開設されたのかも調査した。

布教のため朝鮮へ留学生を派遣することは、日朝修好条規が結ばれた後、明治 10 年（1877）から維新政府の依頼を受けて始まった。維新政府は清及び、朝鮮等の諸外国に仏教の布教を目論んでいた。明治 10 年（1877）内務卿大久保利通は外務卿寺島宗則と本願寺管長巖如上人に朝鮮開教の件を依頼した。両者は本願寺に開教の経験がある奥村円心と平野惠粹を選出し釜山に別院を建設するよう委任した<sup>5</sup>。そして、明治 10 年より若い僧侶の派遣が始まった。

第 1 期の釜山別院の住職になった奥村円心の朝鮮布教記録「朝鮮開教五十年誌」は、今でも唐津にある彼の寺院である釜山海高德寺に所蔵されている。この「朝鮮開教五十年誌」を通じ、派遣された僧侶及び彼らの日常生活や活動が分かるようになった。外務省とは異なり、派遣されたものは年齢が低く、かつ地方へと派遣された。年齢が低かった理由として、朝鮮の言葉だけではなく風習も学ばせるためであった。また、地方へ派遣された理由は、地方の訛りや表現などを学び、地方の人とも交流しやすくするためであった。初めて維新政府より布教活動の依頼を受けた東本願寺大谷派は、日本の僧侶を朝鮮へ派遣することと併せて、仏教に興味を持っている朝鮮人を日本へ留学させた。

以上の様に、第 5 章では維新时期における朝鮮語を学ぶ人々の目的がどのように変遷していったのかを取り上げた。

第 6 章では、幕末から維新时期にかけて活躍した対馬出身の通訳員浦瀬裕について検討した。浦瀬は激動の 19 世紀に、日本と朝鮮の間で通訳官としての役割を担った。江戸期の対

---

<sup>4</sup> 外務省史料「明治 13 年 海外旅券下付返納表進達一件 朝鮮」外務省資史館所蔵。

<sup>5</sup> 朝鮮開教監督部編『日本仏教団（含基督教）の宣撫工作与大陸』東京：龍溪書舎（1927）19。

馬藩通訳員とは代わって、明治期になると維新政府による対朝鮮外交権の接收により、浦瀬のような朝鮮語に堪能な通訳員の活躍する場は拡大した。幕末期、主に倭館における通訳・翻訳の仕事や、漂流民送還に携わっていた大通詞浦瀬は、明治期に入ってから、単に外務省に採用された通訳官としてだけではなく、書契問題を解決する中で朝鮮側と交渉するなど、重要な役割を果たした。また、朝鮮語の教育者としてもその活動の範囲を広げた。この章では浦瀬の事例を追究し、維新政府の成立を転換点としてその以前と以降、彼の役割がどのように広がっていったのかを考察した。

著者は二つの側面から本研究を行った。一つは教育的な側面からであり、もう一つは歴史的な側面からである。教育的な側面とは、近世から近代初期にかけて朝鮮語教育がどのように変遷していったのかであり、また歴史的な側面とは通詞及び朝鮮語修得者の時代的な変遷である。

## 朝鮮語教育の変遷

近世における朝鮮語教育は対馬藩の特権商人「六十人」を中心に行われた。彼らはまず朝鮮語を独学で学んだ後、草梁倭館で朝鮮人の指導を受け朝鮮語力をさら高めた。元禄年間には盛んであった対馬藩と朝鮮の貿易は、18世紀に入ると次第に衰えていく。その状況は朝鮮貿易に従事し、朝鮮語を習おうとする者たちにも大きな影響を与えた。対馬藩の儒学者雨森芳洲の提案により、対馬藩は享保12年（1727）、府中（現在、厳原）に朝鮮語稽古所を設立し、公的な通詞の養成を開始した。これはつまり、個人的に行われていた朝鮮語教育が、学校の設置により公的なものに変化したことを意味する。

この稽古所は朝鮮語通詞を養成するのが目的で「六十人」の子弟がその稽古生として選ばれた。第1期の稽古生は年齢が12歳から15歳の間の39名で、3年間対馬で教育を受けた後草梁倭館へ派遣された。当時朝鮮語は、対馬藩が朝鮮との交隣関係を維持するのに必要であったため、なるべく若い少年を稽古生の対象とした。授業は午前9時から午後3時まで行われ、復読、編文、会話などを学んだ。稽古生には、頻繁に行われた試験と、出席を基に点数に換算し、一番点数が高い順に褒美を与えた。卒業後、通詞として活躍できたのはこのうち6名である。

幕末期より欧米からの開国圧力を感じた日本は、海外における学術や文化の導入を進めた。海外の文明を導入するには、外国語の学修は必須であった。外国語の中で、特に重視されたのは英語、独語、仏語、露語、漢語（中国語）、朝鮮語であった。

明治4年（1871）2月2日、省内には洋語学所が、同月8日には漢語学所が開設された。通訳官を養成するために設置された外務省語学所である<sup>6</sup>。語学所は明治6年（1873）5月5日に文部省が管轄することとなったが、朝鮮語課が初めて設置されたのは明治13（1880）年のことである。この語学所こそ後の東京外国語大学である<sup>7</sup>。

明治期になり朝鮮語教育にも様々な変化があった。明治5（1872）年8月18日、外務卿副島種臣は正院御中に対し、対馬の厳原へ朝鮮語学所を設置するよう提案した。そして明治5年、対馬に朝鮮語学所「韓語学所」が設立された。教員は督長（外務省出張の官員）1名、教授（官員及び雇士）1名、助教（従雇士及び生員中）1名、少助教（従雇士及び生員中）1名が任命され、授業時間は午前8時から午後3時までであった。試験は毎月10日の午前9時から午前10時まで実施された。生徒の身分は士族の子弟で、第1期生は35人、彼らの平均年齢は20.7歳であった。これは、近世の稽古所の生徒の平均年齢（12.1歳）より8.6歳高かった。

この学校はより効率的に研修させるため明治6年釜山の草梁倭館へ移転（草梁館語学所）した。生徒は以前の学校の生徒の中から10名を選び派遣された。年齢は18歳から28歳（平均年齢23歳）であった。ここで教育を受けた生徒10名のうち、6名が様々な理由で研修を辞め、対馬へ戻ったが、明治9年（1876）日朝修好条規が締結された際や朝鮮修信使が来日した際には再び通訳に務めた。

明治13年（1880）、草梁館語学所はついに東京に移り、東京外国語学校の朝鮮語科となる。草梁館語学所で研修を受けていた4人の学生も同時に東京へ移った。彼らは朝鮮語を専攻するだけでなく、歴史、地理、代数、幾何、漢書、国書、体操などの科目も履修していた。

---

<sup>6</sup> 外務省百年史編纂委員会編『外務省の百年』（上巻）東京：原書房（1969）78-9。

<sup>7</sup> 外務省百年史編纂委員会（1969）79。

明治9年（1876）の日朝修好条規締結後には朝鮮語教育はさらに広がり、中学校、高校、医学校、水産学校、仏教学校などでも朝鮮語を第二言語として教えるようになった。さらに日清戦争が終わった明治28年（1895）以降と、日露戦争が終わった明治38年（1905）以降にもその増加が顕著であった。

日本における朝鮮語教育は、商人の貿易を目的とし交隣関係を維持するために学んだ言語習得から、明治期に入り外務省役人など多方面に優れたエリートを育成するための教育へと変わった。また商業や、宗教活動などにおいても朝鮮語習得は必然的な要素へと変わっていった。

### 朝鮮語修得者の変遷

近世において朝鮮語は、対馬藩が朝鮮との交隣関係を維持するために必要な能力の一つであった。対馬藩の朝鮮語通詞に選ばれた者は、朝鮮との貿易が許されていた特権商人「六十人」に所属する者たちであった。朝鮮から距離的にも近く、昔から朝鮮と交流があった対馬藩は、優秀な者には朝鮮へ渡航する際必要な書類「御免札」を発給し、釜山の草梁倭館で通詞が漂流民送還にかかる業務を行う際、それを手伝わせるなどして自然に朝鮮語を学べる環境を与えた。当時朝鮮との交隣政策を重視した対馬藩は儒学者雨森芳洲に朝鮮語教育機関「韓語学所」を創らせた。この「韓語学所」は雨森の教育モットーに基づき、言語だけではなく、朝鮮の風習や習慣についても学ばせた。

近代になり特に日朝修好条規（1876）が締結してからは朝鮮語を学ぶ者に積極的な動きが現れた。著者はこれを公務員、商人、宗教人の三つのグループに分けて、各々について考察した。

まず公務人について、外務省は優秀な人材を選び、7年間9人の官費留学生を朝鮮へ派遣した。留学生らは標準語を学ぶため京城に留学し、自分のレベルに合わせて教師及び教材を個別的に選択し、外務省の事務と言語習学をともに行った。彼らは明治9年（1876）、明治13年（1880）、明治15年（1882）朝鮮修信使が派遣された際に通訳に務め、韓国併合が行われる直前には、朝鮮各地の調査にも参加した。

次に、商人の間でも朝鮮語を学ぶ傾向がみられる。日朝修好条規の締結後、経済的な利

益を得ようと朝鮮へ移住する日本人の数が増加した。日本国内及び、朝鮮において朝鮮語を教える商業学校の数が増え、特に日清戦争（1894-5）、日露戦争（1904-5）の直後においてその傾向が顕著であった。

さらに宗教人について、維新政府は日朝修好条規締結直後、東本願寺大谷派に朝鮮における布教活動を依頼した。細緻で長期的な計画を立てた大谷派は、各地に別院を建て、地元の人と交流しながら初めて朝鮮での布教活動を行った。大谷派は若い僧侶を朝鮮へ派遣し、自然に朝鮮の言葉や風習を学ばせた。このように、明治期になると様々な人が多様な理由で朝鮮語を学んだ。

またこの時期は才能がある者には自分の能力を発揮できるチャンスの時期でもあった。幕末と維新期を生きた浦瀬裕がその例である。浦瀬は幕末・維新期にわたって活躍していた旧対馬通詞である。著者は宗家文書<sup>8</sup>や、外務省記録<sup>9</sup>、また朝鮮王朝実録を通じて、彼を追求した。

明治になると、対朝鮮外交権と倭館は外務省に接收された。明治5年（1872）旧対馬藩に与えられた最後のチャンスであった書契問題は結局解決できず、旧対馬藩の役人はその不満を倭館から乱出することで現した。これをきっかけとして外務省は花房大丞を倭館へ派遣し、人員調整を行ったが、通詞含め数人の旧対馬藩の役人はそのまま残された。浦瀬は、朝鮮との交渉で外務省に命令された交渉内容を勝手に変えたことが露見してしまったにも関わらず、そのまま外務省の通訳官として任用された。彼のことを外務省は「表と裏がある人物」、朝鮮政府は「わかりにくい人」と描写している。しかし当時、彼ほど両国語ができる人材が他にいなかったため、両政府はやむを得ず彼を登用した。浦瀬を完全に信用できなかった日本側と朝鮮側は、通訳官の育成に力を入れはじめた。

幕末期、浦瀬は通詞でも最高の地位である大通詞であったが、当時彼の仕事は対馬藩と朝鮮通訳官の間で連絡を伝える単なる「連絡係」にすぎなかった。しかし、明治期になると、

---

<sup>8</sup> 宗家文書「毎日記 朝鮮方」（安政4、6、7年、慶応2、3年）、「毎日記 頭役」（慶応1年）、「毎日記 代官」（慶応2年）、「毎日記 雑交隣方<sup>8</sup>」（慶応4年）長崎県立対馬歴史民俗資料館所蔵。

<sup>9</sup> 朝鮮総督府編「朝鮮事務書」（1巻～29巻）釜山：釜山広域市民図書館所蔵。

彼の朝鮮語能力は外務省にも認められ、倭館が外務省に接收され人員調整が行われた時も彼はそのまま残された。そして浦瀬は単なる通訳官ではなく日朝間の交渉にも関与し、また外務省の朝鮮語教育機関や、東本願寺大谷の別院で朝鮮語を教える教育者としても活躍した。日韓関係が目まぐるしく変化するこうした時期が、実力者の浦瀬の全盛期となった。